令和8年度　学校自己評価表

三原市立西小学校（校番5）

a 学校教育目標	夢や目標の実現に向けて， 自ら学び　ともに伸びようと行動する児童の育成	b 経営理念 ミッション・ビジョン	【ミッション】志を抱き，その実現に向けて考え，行動できる未来の創り手の育成 【ビジョン】「自ら学び　ともに伸びようと行動する」という教育風土がある学校 ＜めざす学校像＞「安心安全な学校」「すべての児童に学びの居場所がある学校」「全ての児童に主体的な学びを実現する学校」 ＜めざす子供像＞「規律あるかかわり合いを通して，自ら考えともに伸びようとする子供」「友達に目を向ける子供」 ＜めざす教職員像＞「児童を守り，育て，育む」という職責を自覚し，行動する教職員

評価計画							自己評価				改善方策	学校関係者			
c 中期経営目標	d 短期経営目標	e目標達成のための具体的方策（大枠）	f 評価項目 ＊市の指標	指標	目標値	10月 h 達成値	2月 h 達成値	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析	n 改善方策	l 評価 イ	ロ	ハ	m コメント
確かな学力 主体的な学びを実現する取組を通し，学力の定着と本校の目指す資質・能力の育成を追究する	【主体的な学びを実現する授業づくりによる学力定着】 必要感のある問いの設定と問い返し発問を中心とした授業づくりを通して，主体的な考え，ともに伸びようとする児童を育成する。 R80を核とした授業デザインを通して，各学年で身に付けるべき学力を確実に定着させる	・「今日の学習でどんなことが分かりましたか」「今日の学習は他にどんな場面で使えそうですか」などの発問を通して学習内容の確認，学習内容と関連付け，一般化したり，学習内容と自らをつなげる授業づくり【研究部】 ・学習の見通しをもち学習の進め方を調整する場面、考えを記録・共有し，比べる場面、振り返りを蓄積し次の場面につなげる場面を位置付ける授業づくり【研究部】 ・「R80」を活用した「学びのゴール」から逆算した45分間で完結する授業づくり【研究部】 ・授業導入時に，「ズレ」を用い，児童が本時の「問い」を明確につかみ，「なぜだろう」「解決したい」と思う質の高い「問い」を持たせる授業づくり【研究部】 ・「それはどういうことかな」「どうしてそうなるのかな」などの発問や児童の表現に対して反論したり，別の案をだしたりして思考を揺さぶり，新たな思考を引き出すための発問を行い、児童の思考や対話を活性化する授業づくり【研究部】 ・学習規律を徹底し，親和性のある学習集団づくり【研究部】【生徒指導部】 ・実生活や実社会の課題を解決する総合的な学習の時間におけるプロジェクト型学習の充実【研究部】 ・反復により学力の定着を図る「ドリルタイム」、放課後にできていないことをやりきって下校する「やりきるタイム」を全教員で組織的に取り組むことや家庭学習の習慣化を保護者に働きかけることで、基礎学力の定着を図る。【研究部】	各学級の単元末テスト（国語，算数，社会，理科）の学級平均値が指標に示す点を超える教科数（44教科） 【評価時期】（7月　12月）	平均値 1・2年生（90点） 3・4年生（85点） 5・6年生（80点）	44／44 教科	57%		① 56.8% ③ 100.1% ④ 97.1% 平均 84.7%	B	単元末テストの結果の詳細は次のとおりである。 低学年　中学年　高学年　全体 目標値の達成数　3　2　20　25 評価項目数　8　16　20　44 達成値（%）　37.5　12.5　100　56.81% 達成度　D　D　A　D ○特に中学年においては、16の評価項目数のうち6項目が80点を下回っている。昨年度の標準学力調査からも現3年生の国語（－4.9ポイント）、現4年生の国語（＋1.7ポイント）算数（＋0.5ポイント）と学力の定着に課題があったことから、下学年からの積み上げが不十分であったことが影響していると考える。一方で、高学年は、全学級で目標値を達成できた。算数科においては、習熟度別授業を行い学力差に対応した指導が行っていることが要因であると考える。また、低学年は指標90点では37.5%の達成であり、学力定着の課題に加えて指標や配点の高さ等から達成値が低くなっていることが考えられる。一方で指標85点でみると全項目で達成できており、昨年度の標準学力調査での2年生の国語（－1.3ポイント）等の結果を勤案すると成果が見えていると捉えている。全校の単元末テストや授業の様子からは、学力向上が伸び悩んでいる要因は、「聴く力」に課題があると分析している。最後まで聴くことや比べながら聴くことの徹底が不十分であること、学習規律の定着が十分でない生徒指導上の問題が影響していると考える。 ○児童質問紙によるアンケートからは、（あ）の項目で91.9%の肯定的な評価であった。9割を超える児童が授業はよくわかると感じている。高学年の算数科では習熟度別授業を実施していることも要因であると考える。一方で、1割の児童が否定的な回答をしている。原因として、既習内容の定着が不十分であることが考えられ、個別指導の充実を進めていかなければならない。また、（い）の項目については、78.2%と目標を達成することができなかった。一斉授業が中心となり、学びの自由度が低くなっていることが考えられる。 ○教職員アンケートでは、㋐㋑㋒㋓㋔で目標に届かなかった。今年度より、授業研究で取り組んでいる内容に係る項目のため、まだ定着が十分でないと考える。今後、さらに授業研究を推進していく必要がある。	次の3点の改善方策を講じる。 ①詳細な学力分析と支援の計画・実施 　夏季休業中に、全国学力・学習状況調査や1学期の単元末テストの結果分析を行い、各学年ごとに課題の残っている単元や内容をピックアップし、2学期に行う学力補充計画を立案した。その計画表を基に、進捗状況を確かめながら取組を進めていく。 　R80を活用し、振り返りから逆算しためあてや「問い」の設定、考えを深める「問い」の工夫、導入時の既習事項の効果的な振り返りの工夫を行う。 　問題文を読み解く力や思考力・判断力・表現力等を伸ばすための具体的な方策として、日頃の授業では、「①問題文の必要な情報に下線を引く」「②授業の導入で既習の振り返りを行ったり、図と式と言葉を関連付けて指導したりする」ことを繰り返していく。 　全校では、教職員の総力で、下校後の25分間の「やりきるタイム」を実施し、その日の学習内容やできていない課題をやりきらせて下校させることを継続する。 　これらの取組を通して、全校で、学力調査や単元末テストでの無答をゼロにすることを目指す。 ②授業研究の推進 　授業研究の推進に向け、夏季休業中に3日間の日程で「授業づくり研修」を行った。研修では、本校の授業研究の方向性を共有し、演習シートを活用して R80から逆算した授業案を学年部で協議しながら作成することができた。今後も、講師を招聘し、理論研修や授業案相談会を行ったり、職員全体で指導案検討会を行ったりする中で、授業案の更なるブラッシュアップを図り、授業力向上に向けて取り組んでいく。 ③「聴く力」を育成に向けて 「聴く力」を伸ばしていくために、学級全体で静かに聴く雰囲気を創っていくために、学習規律に係る教職員間の共通認識を図り、「聴くことの指導の徹底を図る。授業では、「考えたくなる」「聴きたくなる」必要感のある「問い」を教員が準備をすること、発言の途中で言えなくなった友達を助ける雰囲気づくりをすること、机間指導を行い状況を把握すること、R80の際のペアでの振り返りで相手の発言を肯定的な言葉がけをするように指導することなどに継続して取り組む。さらに、生徒指導部や管理職と連携し、学校全体が、静かに立ち止まって校内放送を聴くこと、廊下・階段は静かに歩くことなど、落ち着いて生活ができる教育環境づくりに継続して取り組む。	5人中5人			・低学年時に低かった学力が高学年で改善傾向にあるのは、教職員の努力の成果だと思う。若手教職員の授業力が児童の学力に直結するので、継続的に研修等を行ってほしい。 ・授業案を、教職員が協働しながらスピーディにロジカルに作成できている点がよい。児童にとって、学習上で分からない事や詳しく知りたい事がある時、担任の先生の存在が一番大きいと平素より思っている。今まで通り児童が分かりにくい際は、まずヒント付けから方向性の指導をお願いしたい。 ・「聴く力」は、学力向上の重要な要素であると思う。聴く姿勢を育てるとともに、聞き取った内容をR80 を活用し表現させることも工夫してほしい。 ・「聴く力」をつけるためには、「聞く」ではなく、傾聴力を鍛えることが大切。相手の言葉には耳で、表情には目で、気持ちには心で聴くことができる子供たちは、コミュニケーション能力も高いと思う。教職員にも傾聴の力をつける研修が必要だと思う。
豊かな心と親和性の高い集団 安心して学べる学習環境の基盤となる，規範意識の醸成を図るとともに，自他を尊重する心情・態度を育成する	【規範意識の育成】 児童に所属意識を持たせ，円滑な集団生活の基盤となる（規範意識・ルール・マナー等）を身に付けさせる	・「西小のきまり」に基づく積極的な生徒指導を日常的に実施【生徒指導部】 ・生活や学習の場で自己決定する場の設定【生徒指導部】【研究部】	icheck「自己肯定感」「学級適応感」のクロス集計結果が全国平均以上の児童の割合 【評価時期】（6月　12月）	全国平均を上回る学級数	13／13 学級	11/13 学級		① 84.6% ② 88% ③ 97.9% （え） 91% （お） 98.8% （か） 102.4% （き） 76% （く） 97.6% （け） 109.4% （こ） 96.5% ④ 100% 平均 85.7%	B	○icheck「自己肯定感」「学級適応感」クロス集計結果は、13学級中11学級が全国平均を上回った。下回った2学級は、対人ストレスや自己肯定感などで困り感を感じている児童が多く、支援を要する児童が多い実態がある。 ○教職員アンケートによる調査「全ての児童に学びの場がある。」については、88%だった。1学期末の時点で、11日以上の長期欠席者は21名、不登校児童19名。不登校児童のうち4名は、学びの場が校内外で確保できていない。 ○児童質問紙によるアンケート調査については、8項目中5項目が目標値を下回る結果となった。特に、「困ったことがあったとき、先生や友達に相談できる」の項目が肯定的評価76%と目標値を大幅に下回っている。この結果から、人間関係作りやコミュニケーションに課題があると考え、これらの課題が、生徒指導事案に繋がっていることも考える。そのため、クラス会議や授業づくりなどを工夫し、児童が安全安心に学べる学校づくりを目指していく。 ○いじめ事案やいじめにつながる事案については、チーム学校で、学級担任が一人で抱え込まない体制で行うことができた。また、学期始め、終わりに児童面談を行い、児童の自己肯定感につながる内容を伝えたり、困り感、不安感などを聞いたりすることで、児童と教師の関係作りに努め、生徒指導事案の未然防止にも取り組んできた。	安心安全な教育環境づくりを目指して、次の8点に取り組む。 ①不登校児童をはじめ全ての児童の学びの場を確保するために、作成した個票を基に短期目標や手だてを検討する不登校児童対策委員会を月1回開催し、目標と手立てを教職員間で把握していく。また、保護者との関係を切らさないように、電話連絡や家庭訪問を行い、連携を継続していく。 ②「市ふれあい教室」「市こども家庭センター「すくすく」」、地域の関係機関との連携、中学校との連携を行う。 ③月1回の生徒指導委員会、いじめ防止委員会、不登校児童対策委員会で、個票を作成し現在の児童の姿や短期目標、手立てを共有し、学校全体で取り組み体制を確立する。 ④週2回の連絡会では、気になる児童の交流やいじめの被害児童の様子の共有などを行い、全教職員が児童の課題を把握できるようにする。 ⑤「生徒指導の実践上の4つの視点『自己存在感の感受』『共感的な人間関係の育成』『自己決定の場の提供』『安全・安心な風土の醸成』を教職員が授業や日々の生徒指導で実践できるようにする。そのために、研修で学びを深めたり、リモート朝会で生活のきまりについて児童に指導したりする。 ⑥学期始め（可能であれば学期終わり）に個人面談を継続して行う。面談では、児童の自己肯定感につながる内容を伝えたり、困り感、不安感を聞いたりすることで、児童と教師の関係作りに努める。そうすることで、日常的にも、児童が悩みを教員に相談できる風土が確立していくと考える。 ⑦いじめ事案や暴言暴力、授業妨害が発生した時には、学年主任や生徒指導主事、管理職へ報告をできるだけ早く行い、複数で児童への聞き取りと指導及び保護者対応を引き続き行っていく。 ⑧チーム学校として一人の教員が抱え込まないように、総力をあげて複数での学習指導や休憩時間の見守りができる体制づくりの構築を引き続き目指していく。	5人中5人			・特別支援学級の増加中でも不登校児童への対応などよく取り組まれている。校内委員会を中心に、学校全体で取り組まれている姿勢を感じる。 ・児童の自己肯定感の確立とともに集団づくりに努めてほしい。 「チーム学級・学年」になれば幸いである。 ・不登校児童は、人と接しているのでしょうか。児童とつながっている大人が、一人でもよいので居ることが大切だと思う。 ・児童たちの心の中は見えずとも、顔や言葉に出れば、客観的にも行動や考え方に積極性は生まれるものであり、逆に言葉に出なければ、誰かに頼りたい気性になり、依存したい状態だと思われるが、児童の居場所づくりにも一工夫をしてほしい。
	【共感的な人間関係づくり】 児童に，他者とかかわり合う場面を与え，その中で，自己肯定感を高めさせるとともに，相手を大切にする心と態度を身に付けさせる	・全ての児童に，学校内（学校外も含めて）に「学びの場」がある取組【生徒指導部】 ・全ての児童が，困った時に学校の中に相談できる人や場がある取組【生徒指導部】 ・「聞く」ことや「学び合い」を大切にした授業づくり【研究部】【生徒指導部】 ・学級でいっしょに生活している友達のことにもっと目を向け、お互いに気持ちよく生活できているかに関心を持ち、問題があれば、その問題を自分たちで解決しようと真剣に話し合うことができる集団づくりのための学級活動の充実【生徒指導部】	児童質問紙によるアンケート調査 （う）「学校のきまりやルールを守って生活をしている」 （え）「注意されたら、1回で直している」 （お）「自分にはよいところがある」＊ （か）「努力すれば，自分もたいていのことは出来ると思う」＊ （き）「困ったことがあったとき，先生や友だちに相談できる」 （く）「将来の夢や目標を持っています」 （け）「地域のことが好きです」（1，2年生） （こ）「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」＊（3～6年） 【評価時期】（7月　12月）	児童質問紙肯定的評価の割合	（う）95% （え）100% （お）85% （か）85% （き）100% （く）85% （け）85% （こ）85%	93% 91% 84% 87% 76% 83% 93% 82%			B					
			いじめ事案やいじめにつながる事案を把握し、児童と保護者、学級の児童に対応する。【評価時期】（7月　12月）	対応した割合	100%	100%								
健やかな体 生涯にわたって健康を 保持増進し，豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成する	【生涯にわたって健康づくりをしよとする健康教育の充実】 【生涯にわたって運動しようとする心情の育成につながる授業改善】 児童に確かな目標を持たせ，生涯にわたって健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現しようとする心と体を育成させる	・生活リズムを整える取組の実施【保健安全部】 ・楽しく，運動量がある体育科の授業づくり【保健安全部】 ・自分の目標に向かって挑戦することができる体育科等の授業づくり【保健安全部】 ・児童同士が「見る」ことを大切にした体育科の授業づくり【保健安全部】 ・安全に運動できる環境づくり【保健安全部】	児童質問紙よりアンケートによる調査 （さ）「体育の授業は楽しいです。」 （し）「運動することが好きです。」＊ （す）「おうちで決めた時刻に寝ている。」 【評価時期】（7月　12月）	肯定的評価の割合	（さ）90% （し）90% （す）80%	（さ）88% （し）84% （す）73%		（さ） 97.8% （え） 93.3% （お） 91.2% 平均 94.1%	B	○全学年において、「運動することが好きです」に否定的な回答した61名の児童のうち「授業が楽しい」と感じている児童が20名存在する。学校全体として、安心・安全を第一に考えて複数の職員で授業を展開したり、最後までやり遂げることが大切であるという価値づけをしたりしながら取り組んできた成果だと考える。しかし、残りの41名は、体育の授業と運動の両方に対して、楽しさを感じることができていない。これらを改善するために、2学期以降には、短縄跳びや大縄跳び大会等で個人や学級の目標を決め、その目標達成のために学級の友達と協力しながら進めていくことで、「できる楽しさ」や「できるようになった喜び」を感じさせていきたい。 ○「おうちで決めた時間に寝ている」の項目については、低学年では肯定的な回答が非常に多いが、学年が上がるにつれて肯定的な回答が減少していく。特に、3年～6年生では18名が否定的な回答をしており、今後の大きな児童への指導及び保護者への啓発課題となる。	次の3点について取り組む。 ①運動の楽しさを感じることができるように、自分や学級の目標に向かって挑戦したり協力したりすることができる体育科等の授業づくりを目指す。 ②運動を「する」のみではなく、「みる」、「支える」、「知る」の視点を取り入れた授業づくりができるように、児童同士で見合ったり、見学する人が友達の頑張っている姿を見てまわったりすることができるカードを作成し取り組む。 ③「就寝時刻」については、睡眠の大切さを参観日に学校からの伝えたり、保健だよりや市教委の作成資料を活用したりして、保護者との協力体制を整えていく。	5人中5人			・体力向上のためには、学校生活の中でも身体をしっかりと動かす工夫が必要だと思う。 ・ゲーム感覚で参加できるスポーツ等を、児童にも聞きながら考えてみてほしい。 ・就寝時刻の重要性を児童にしっかりと認識させることが大切である。 ・ゲームやスマホ等の普及で、運動をしない子供は増えていると思われる。「運動をしない」と「授業が楽しいと感じない」との関係を見てもよいかと思う。
働き方改革	教職員の勤務状況を改善し、健康な状態で、自らも学ぶ時間を確保しながら、専門性を最大限に発揮して、活き活きと児童の教育に邁進できるようにするとともに教職員の健康を維持する。	教育課題に適切に対応する学校体制を再構築するとともに，行事等の精選をし，児童に向き合う時間を確保することで、教職員の働きやすさと働きがいを両立する。【学校経営会議、準学校衛生、不祥事防止委員会】 ・行事等の内容を精選し，行事に係る練習時間数を減少する。 ・総合的な学習の時間、生活科の内容を「じっくり、ゆっくり」と探究できる内容に精選する。 ・各部が担当する行事を精選するとともに、会議や研修等の時間設定を計画的に行う。 ・関係機関・団体と連携する取組について，学校が担う業務を軽減する。 ・生徒指導事案の未然防止の取組及び組織的に対応する体制をつくる。 ・個人情報に係る不祥事を根絶するための取組を不祥事防止委員会で検討し、環境を改善する。	（ア）1か月月時間外在校時間が45時間以下 （イ）1年間におかる1か月月時間外在校等時間の平均時間 （ウ）1年間における時間外在校等の平均時間を年間 【評価時期】（8月末・1月末）	（ア）教職員の割合 （イ）平均時間 （ウ）平均時間	（ア）100% （イ）30時間程度 （ウ）360時間程度	（ア）44.8% （イ）44.4時間 （ウ）171時間		（ア） 44.8% （イ） 67.5% （ウ） 70.1% **平均** 60.8%	C	○1か月月時間外在校時間が45時間以下の教職員の割合は、全体の半数近くであった。年度はじめは、学級経営の基盤づくりを進めるため、学級環境の整備や児童との関係づくり、保護者対応等を丁寧に行い、通常月より時間が超過した。また、生徒指導事案への対応や未然防止を、生徒指導主事を中心に組織的に進めていくや、会議を一元化し、事務処理時間を確保していくことが、教職員の在校時間の縮減に徐々につながりつつある。 ○総合的な学習の時間、生活科の学習において、地域住民や関係団体と連携して行うことは、児童が地域のよさや実感した理解を深めたりすることができるとともに、教職員が地域資源を活用しやすくなり、準備・運営の役割分担や負担軽減など働き方の面でも効果が見られている。 ○不祥事防止委員会では、個人情報に係る不祥事の根絶に向け、年間計画に基いた研修、校内規定による運用の管理などを推進するとともに、各学年の実態に応じた指導計画の作成実施について検討し、学校全体で共通理解を図りながら個人情報の適切な取扱に関する指導の充実に努めた。	教育の質の向上を支える働き方改革の推進に向けて、次の4点に取り組む。 ①今後も学力向上や生徒指導の結果につながる着実な取組を継続的に行う。また、生徒指導事案への対応を組織的に進めることで、早期解決を図り、保護者や地域との信頼関係をさらに深めていく。 ②総合的な学習の時間、生活科の学習では、長期休業中に事前の打合せや計画の見直しなどを行い、地域の方と関わる学習のよさを生かしながら、児童にとってより学びの深い活動になるようにエ夫していく。 ③働き方については、準学校衛生委員会での熟議等を通して、目標の自己設定や意識化、運用の工夫を進め、教職員のワークバランスとメンタルヘルスを大切にした改善を主体的に行っていく。 ④今後も不祥事防止委員会を中心とした各種委員会を定期的に実施し、具体的事例を用いた研修や振り返りを通して、教職員の危機意識と倫理観の向上を図りながら、服務規律の徹底と不祥事の根絶、未然防止に継続的に取り組む。	5人中5人			・教職員がいきいきと働けないと、子供たちも元気で安全安心な学校生活は送ることができない。引き続きワークバランスとメンタルヘルスを大切にした改善を行ってほしい。 ・教科指導と生徒指導は両輪。重点的に取り組むことで、教職員の労働時間が少しでも改善できれば幸いに思う。 ・不意の出来事が多いと思うが、一つ一つの対応に感謝している。

研究主題

主体的に考え、ともに伸びようと学ぶ児童の育成　～必要感のある問いの設定と問い返し発問を中心とした算数科授業づくりを通して～

【ｊ：自己評価　評価】
A：１００≦（目標達成）　B：８０≦（ほぼ達成）＜１００
C：６０≦（もう少し）＜８０　D：（できていない）＜６０

イ：自己評価は適正である。
ロ：自己評価は適正でない。
ハ：分からない。